

## 働 く も の

西田 幾多郎

知るといふことは一つの働きであり、知るといふことは働くといふ概念の中に包攝せられると考へるのが普通であるが、却つて後者を前者の中に包攝することができないであらうか。私は働くものと云ふものを考へて見ようと思ふ。

我々が赤の色を見て赤い物と考へる場合、赤い物といふのは表象自體の如きものを意味するのではない、況して赤の概念でないことは云ふまでもない。赤い物とは赤といふ如き感覺的性質を超越して之を有するものでなければならぬ。此故にかかる物は他の性質をも有つことができる、性質の異なるに關らず自己自身に同一なることができるのである。無論單に措定せられたるものは、他の性質を有ち得ないと云ひ得るであらう。措定せられた赤いものと、措定せられた熱いものとは異なつたものである。併し物は單に措定せられたものではない、何處までも性質を超越し

て而も之を有するものでなければならぬ。我々は思惟の要求によつて經驗内容を一し行くに當つて、統一するものと統一せられるものとの間に、内面的統一を見出し得ざる場合、統一者として超越的なる物を考へざるを得ない、而して統一せられるものは、すべてその性質と考へられるのである。物とは經驗内容の偶然的統一と云ひ得るであらう。

働くものとは如何なるものを云ふか。働くものは時に於て自己自身を變し行くものでなければならぬ。我々が時に於て物の種々なる性質を知覺するとしても、直に物が變するとは云はれない。物は不變であつて知覺する我々がその立場を變し行くのかも知れない。自ら變するもの、即ち働くものを知るには、超越的統一が内在的でなければならぬ。内在的なるものが超越的なる時、かゝる矛盾を統一するため、働くものゝ概念が成立するのである。物は相反するものに變し行く、相反するものはその根柢に於て同一なるものでなければならぬ。色が音に變し行くとするも、我々はその背後に働くものを考へることはできない、單に超越的なる物の統一を考へ得るのみである。唯色が色に變し行く時、即ち色が色自身の中に於て變し行く時、我々は働くものを見るのである。類概念として内在的なるものが超越的と考へられ

た時、働くものとなるのである。我々が動くものによつて最能く働くものを知るのは、空間が超越的であつて客觀的世界を構成すると共に、先驗的にして明に内在的なるが故とも考へ得るであらう。一方に於て超越的なると共に一方に於て内在的であればある程、働くものと考へることが出来る。色の如きものも直接の經驗内容として他から導き來ることができないといふ點に於て一種の獨立性が認められ、色自身の發展が働くといふ意義を具するとも考へ得るのである。

超越的と内在的との對立の意義は種々に考へ得るでもあらう。最も嚴密なる意味に於て知識と考へられるものは判斷的知識である。我々は此から出立して見なければならぬ。判斷的知識の内と外とは何を意味するか。判斷は主語と述語とから成立つ。特殊なる主語が一般なる述語の中に包攝せられるのが判斷の本質である。包攝判斷が判斷の最も純なる形と見ることが出来るであらう。自同判斷の如きものでも、その述語は縦主語と同一の範圍を有するとしても、述語的として異なつた意義を有せねばならぬ。然らざれば判斷の意義を成さないのである。主語となるものは、必ずしも判斷的知識の中に入り來るものではない、個物的なるものは之を判斷的知識に分解し盡すことはできない、分解し盡されるならば個物ではなくなる。個

物的知識の基には直観があると考へられるのは、之に由るのである。純粹に判斷的知識の内にあるものと云へば、單に述語によつて指示せられるものでなければならぬ、即ち一般概念的なるものでなければならぬ。主語によつて指示せられるものは、それが述語的となる限り、判斷的知識の内に入り來るのである。主語となるものが述語的なる時、單なる概念的知識が成り立つ、即ち我々は單に判斷の中に於てあると云ひ得る。判斷の立場から判斷的知識を超越するには、之を主語によつて指示せられる方向に求めねばならぬ。主語となつて述語とならないものによつて、判斷と判斷以上のものとの關係を求めるとの外はない。

判斷の主語となるものは如何なるものであるか。判斷とは繫辭によつて述語を主語に加へて成れるものではない。此机が檜から造られてあるといふ時、その主語となるものは實在でなければならぬ、判斷の基には何時でも具體的一般者があるのである。此机といふ時、我々は既に實在全體を見る立場に立つて居るのである、綜合的統一の立場に立つて居るのである。此實在について檜にて造られて居ると述語するのであるが、かゝる述語も元來具體的一般の中に含まれて居るものでなければならぬ。數學の方程式について檜にて造られて居るなどゝは云はれない。此實在

といふものが限定せられた時、此机が檜から造られて居るといふことが動かすべからざる眞理となるのである。かゝる意味に於て判断は具體的一般者が自己自身を限定することによつて成立すると云ふことができる。綜合的統一の立場に於て限定せられたもの、全體の意味を擔ふものが主語と考へられ、限定せらるべきものが述語と考へられるのである。現實的なるもの、形つくるものが主語の方に立ち、可能的なるもの質料となるものが述語の方に立つと考へることもできる。今此机が檜から造られて居るといふ如き實在判断について云つたことは、數の判断や色の判断の如きものについても、同様に云ふことができるものであらう。數とか色とかいふ具體的一般者が自己自身を限定することによつて、數の判断、色の判断が成立するのである。此場合、主語として限定せられるものは、此机といふ如き意味に於て個物的なるものではないが、やはり綜合的統一の立場に於て限定せられたものとして、全體の意味を擔ふと考へ得るでもあらう。數理的判断に於ては、數の體系が眞の主語となり、色の判断に於ては色の體系が主語となるのである。唯具體的一般者の性質の異なるに從つて、主語と述語の關係に於て種々なる相違を認めざるを得ない。實在判断に於ては、その結合が偶然的であり、無限の可能を許すと考へられるが、數理的判断

の如きに於ては、必然的であつて他の可能を許さないと考へられる、従つて主語と述語とは分ち難きものと考へられるのである。

一方に於ては述語となるものが判斷的知識に内在的なるものと考へられ、一方に於ては主語となるものが全體の意味を擔ふものと考へられるならば、述語となるものが同時に主語となる時、即ち主語と述語との範圍が合一する時、我々は完全に判斷的知識の中にあると云ふことができる。一般概念が何處まで自己を限定して行つても、自己の範圍を出でない、自己の中に自己を限定すると考へられる時、知識は完全に内在的といふことができるのである。之に反し主語が述語の範圍を踏み越へた時、我々は判斷的知識の外に出たと云ふことができる。此場合、特殊なるものが一般なるものを包むことゝなる、主語の中に述語が含まれることゝなるのである。而して之と共に判斷は具體的一般者の自己限定によつて成立するといふ意味が明となる。如何にして判斷が判斷自身を超越し得るかと云ふでもあらう。併し如何なる判斷も自己自身を超越するものによつて、維持せられて居るのである、判斷の客観性は此にあるのである。判斷の根柢には自己自身に同一なるものがなければならぬ、而して自己自身に同一なるものは直觀的なるものでなければならぬ、直觀と判斷と

の結合する所に自己同一の判断が成立するのである。包攝判断の如きものであつても、類概念其者は先づ自己同一なるものでなければならぬ。判断はその背後に限りなく自己を超越するものを有つと考へられるのであるが、斯く自己を超越するものが又類概念として述語的なる時、具體的一般者の自己限定として判断的知識が成立するのである。此意味に於ては、判断は自己の外に自己を超越するのではなく、却つて自己の中に自己を超越し行くと云ふことができる、自己自身の深き奥底に還り行くと考へることが出来る。構成的範疇と反省的範疇とは相離れたものではなく、それが判断的知識である限り、構成的範疇の背後に反省的範疇が伴ふて居ると云ふことができる、反省的範疇が構成的範疇を包んで居ると云ふことができる。前者の中に於て後者が構成せられるのである。如何にして反省的範疇から構成的範疇が發展するであらうか、私は今此問題に立ち入ることはできないが、右に云つた如く、包攝的判断の背後には、自己同一なるものを認めざるを得ない。此方向に於てすべての性質を統一する物の概念が認められ、此方向を更に深く進むことによつて連続なごの概念も發展するではないかと思ふ。

種々なる色の性質を色の類概念の中に包攝して考へる時、その根柢に自己同一な

るものがなければならぬ。之に反し、統一せられたる一つの實在界が考へられる時、その空間の一々の部分は延長といふ如き類概念の中に包攝せられねばならぬ、又之に於て存在する一々の物は物の類概念の中に包攝せられねばならぬ。かゝる條件の下に始めて統一せられた一つの客觀界が考へられるのである。唯一の空間、唯一の實在界といふものが考へられる場合、それが考へられると云ふ限り、可能なるもの一つでなければならぬ、一般概念の特殊でなければならぬ。我々が此世界を唯一と考へるのは感覺の立場から見るのである。實在界は感覺内容を含まねばならぬのは云ふまでもないが、感覺内容は思惟に對して偶然的である、可能なるものゝ一つである。自己同一なるものとは、述語が自己自身の中に還るものでなければならぬ。主語として志向せられたものが述語として志向せられたものに同じければ同しい程、自己自身に同一なるものと考へられるのである。一方から見れば、自己同一なるものは何處までも達することのできない極限點の如きものと考へられるであらう、限りなき述語が之を廻つて志向するも達することのできない中心點の如きものと考へられるであらう。併し判斷的知識として現れる限り、それは述語の中に包まれて居なければならぬ。一般的なるものが自己自身を限定することによつて判斷



が成立すると云ひ得るならば、無限に達することのできない一點と考へられるものは、却つて之を包むものでなければならぬ。自己同一の具體的一般者は自己の中に自己を映す鏡の如きものでなければならぬ、何等の映すものなきが故に、鏡が鏡自身を映すといふの外はない。此の如く自ら空しくして、すべての物を容れる空間の如きものが、自己同一の範疇によつて構成せられた對象界でなければならぬ。所謂構成的範疇によつて構成せられると考へられる對象界も、この外に於て構成せられるのではなく、この内に於て構成せられるのである。すべて我々に對し客觀界として立つものは、自己自身に同一なるものでなければならぬ。斯くして一々の物が物の概念の中に包攝せられ、一般的なるものが自己自身を限定することによつて判断が成り立つといふことができる。かゝる對象界は所謂實在界を容れて尙餘あるが故に、その中に於て無限の可能的世界が考へられ、その一が限定せられることによつて實在界の判断が成立するのである。我々は具體的なるものを分析し抽象し得ると考へるが、抽象的思惟は外から具體的實在を分析するのではなく、反省的思惟の對象界が具體的思惟の對象界を包むが故である。物が空間に於て無限に分ち得ると考へるのと同様である。

我々が赤の色を見て赤い物を考へる時、色の一般概念といふ如きものを超越せねばならぬ、一般概念を限定することによつて物の概念に到達するとはできない。それには所謂構成的範疇が加はらねばならないのは云ふまでもない。併し物の概念の成立する背後には、自己同一なるものがなければならぬ、之によつて物の概念も成立するのである。自己同一の範疇によつて構成せられた對象界の彼方に、物の概念が成立するのではなく、此對象界の中に於て成立するのである。知識の明證といふことが、フッサールの云ふ如く直覺と意味との合一にあるとするならば、その對象は自同判断の主語的方面に含まれ、その意味は述語的方面に含まれ、此の兩面の合一を意味する自己同一の判断によつて、知識が成立すると考へることができる。すべての知識の對象界は此兩面の間にはさまれて居る。自己同一の判断の兩面はすべてを挾んで無限に廣がる平行面の如きものでなければならぬ。知識成立の基にはかゝる兩面の合一とも云ふべき自ら照らす鏡がなければならぬ。かゝる兩面の合一といふべきものは、すべてを容れて尙餘ある包理性的非合理性、包形相的質料なるが故に、單に映す鏡といふべきものであらう。ヘーゲルの論理學の始に於ける單なる有は此の如き意味の有でなければならぬ。かゝる立場に於て物の概念が如何にして構成せ

られるであらうか。物の概念は我々が経験そのものを主語とすることによつて成立つ、経験そのものを判断の對象界に持ち來すこと、即ち合理化することによつて成立つ。経験を合理化することは之を自己同一の鏡の内に映すことでなければならぬ、之によつて経験が合理的に統一せられるのである。経験内容を概念化すると云へば、色の體系といふ如きものも経験的内容の概念化とも考へ得るであらう。色の類概念に屬するものが、それ自身の間に動かすべからざる關係を有し、色の判断は之によつて成立つ。然るに我々は色を物とは考へない、物とは空間、時間因果の範疇によつて構成せられたものでなければならぬと云ふでもあらう。併し色の判断の成立するには、その根柢に自己同一なる色自身といふものがなければならぬ、而してそれは主語となつて述語とはならないものと云ふことができる。又物は時間、空間、因果の範疇によつて構成せられると云ふも、その主體として感覺的なるものがなければならぬ、此等の範疇はかゝる非合理的なるものを合理化する道具に過ぎない。色の判断といつても、その主語となつて述語とならないと考へられる方面に於て、構成的範疇によつて構成せらるべきものも含んで居ると考へることが出来る。單に述語的なる色の一般的概念といふ如きものが考へられる時、それが構成的範疇を含む

と云ひ得ざることば云ふまでもない。併しそれが自己自身を限定することによつて色の判断を成立せしめる具體的一般者と考へられた時、少くも自己の内に構成的判断を成立せしめる可能性を有するものでなければならぬ、自ら照らす自己同一の鏡でなければならぬ。色の直観を越えてその背後に物や力の世界があるのではなく、却つて此直観の中に於て成立すると考へることが出来る。色が變ずると云ふにも、之に先だつて種々なる色の識別的判断がなければならぬ。變ずるものはその反對に變し行き、相反するものは他面に於て相等しきものでなければならぬ。少くも同一の類概念に屬するものにして互に相移り行くと云ふことが出来るのである。加之、我々が單に眼を以てするならば、變化の起る場所も色を以て充たされて居なければならぬ。何處までも色自身の中に於て色の變化を構成して行くのである。直接の經驗に於ては、色が時間、空間の中にあるのではなく、寧ろ色の中に空間、時間があるのである。變化の座標となるものが亦色の類概念に屬する時、色が自己の中に自己を構成すると考へざるを得ない。色の自同判断の對象界に於て種々なる色の關係が構成せられるのである。色の種々なる構成は色そのものに屬せないとも考へられるであらう。例へば、色そのものから形といふ如きものは出て來ないといふこ

とができる。併し畫家などの様に我々は直接に色の中に形を見るのである、變化といふものすら見るといふことができるのである。此故に畫家は動くものを描くことができる、平面の畫布に無限に深いものを盛ることができる。それは心理學者の云ふ如く單に聯想によるのではなく、ベルグソンの云ふ如く薔薇の花の中に幼時の記憶を嗅ぐの類でなければならぬ。我々が物の形とか變化とかいふものを考へるにも、その根柢にかゝる直覺がなければならぬ。物は同じ類概念の中に變じ行く、その主體となるものは單に抽象的なる一般概念であつてはならぬ、然らざれば變ずるといふことは無意義である。それでは、色の性質に關する單なる抽象的判斷と、かゝる直覺とは如何なる關係に於て立つか、如何なる意味に於て前者も亦後者に基くと云ひ得るが。色の抽象的判斷は色の直覺の成立する背後に廣がる自同判斷の述語的方面に於て成立するのである。知識の立場に於ては反省的範疇の對象界はいつでも構成的範疇の對象界を包容して無限に廣がつて居ると考へなければならぬ。

物の世界は我々が經驗内容を合理化することによつて成り立つ。經驗を合理化するとは經驗自身が主語となることである、即ち主語となつて述語とならない主體

となることである。而して斯く經驗自身が主語となるといふのは經驗が自己同一なる具體的一般者として、自己自身を限定することによつて、自己の中に判断を成立せしめることではなければならぬ。經驗内容は先づ單に性質的なるものとして類概念によつて統一せられる、併しかゝる關係の成立するにも、その根柢となる直観がなければならぬ、包攝判断の根柢にも主語となつて述語とならないものがなければならぬ。此方向に於て一般と特殊との關係は變じて全體と部分との關係となる、一般的なるものは全體の意義となり、特殊なるものは部分の意義となる。更に此方向に進むことによつて物の概念が成立するのである。物の判断に於ては、主語は述語を超越して、所謂主語となつて述語とならないものとなるのである、是に於て主語と述語とは一旦相離れると考へられる、併し經驗内容そのものが主語となり經驗其者が合理化せられるといふ以上、何處までも感覺的性質が主語とならねばならぬ。感覺的性質が自己の中に自己を限定することによつて、判断を成立せしめる具體的一般者ではなければならぬ。此故に外に無限なる感覺的性質を以て充たされたる物の世界が成り立つのである。一般的なるものは單に述語的なるものではなく、すべて主語となるものを包む場所となるのである。非合理的なるものが判断の主語と

なる時、我々は外に無限進行の世界を見なければならぬ、時間空間といふも非合理的なるものを合理化する範疇である。而して構成的範疇を包む反省的範疇の對象界として、すべてを容れて無限に廣がる場所が成立つのである。感覺的性質といへば、單に一般的なるもの、抽象的なるものと考へられるが故に、感覺的性質が主體となるとは考へ難いであらう、感覺的性質は却つて物の第二次的性質とも考へられる。併し單なる時間空間の數學的關係から物の世界は成立せない、かゝる關係の主體となるものは感覺的性質でなければならぬ。勿論、物理現象の主體となる感覺的性質とは、色とか音とかいふ特殊なるものではなく、すべてに共通なるものでなければならぬ、感覺的性質一般といふ如きものでなければならぬ。感覺一般といふ如きものは、抽象的概念であつて、實在的なものではないと云ひ得るでもあらう。併し我々は具體的に色を見る場合、いつでも一般的なるもの背景に於て見て居るのである、單に特殊なるものは却つて考へられたものに過ぎない。色の經驗の根柢に色一般といふものを考へ得るならば、之を押し進めてすべての感覺の根柢に感覺一般といふものを考へ得るであらう。單なる一般概念の對象界として此の如き對象界がなければならぬ。かゝる反省的範疇の對象界が所謂構成的範疇の構成によつて成る判斷の

主體となるのである。單なる時間や空間に對しその内容を與へるものは、異同の範疇によつて構成せられた性質的對象界でなければならぬ、之によつて物理的世界が構成せられるのである。所謂物の第一次的性質の世界といふのは、純なる感覺一般を主體として構成せられたものでなければならぬ。

私は最始に類概念として内在的なるものが超越的と考へられるとき、働くものの概念が成立すると云つた。今此考に還つて見たいと思ふ。抽象的概念として單に述語的なるものが超越的であることのできないのは云ふまでもない。併し構成的範疇によつて構成せられた對象界の背後に、反省的範疇によつて構成せられた對象界を認めるならば、類概念の對象界とも云ふべきものは、一方に於て述語的なると共に、一方に於て判断の主語として判断自身を超越すると考へることができると。すべての判断の根柢に自己同一なるものがあり、直觀がなければならぬと考へられるのは之に由るのである。物の概念が經驗内容を主語となし之を合理化するとするならば、かゝる合理化の徹底は自ら物の概念から力の概念に到らねばならぬと思ふ。類概念の根柢にも自己同一なるものがなければならぬ、即ち一の直觀がなければならぬ。自己同一に於て構成的範疇と反省的範疇とが結合して居る、而して反省的範



疇によつて與へられた質料を構成的範疇によつて構成して行くのである。反省的範疇によつて與へられる質料的對象界が單に形式的なる時數の世界が構成せられるのでもあらう。主體として何處までも主語となるものが、述語となるものと同じき時、全體と部分といふ如き關係が成立する。唯、經驗内容を主語として之を合理化しようとする時、主語は述語的なるものを超越して物と性質との關係が成立する、述語的なるものはすべて性質となる。併し經驗が合理化せられるといふ以上、それは判斷を超越したものであつてはならぬ、却つて具體的一般者として自己の中に、判斷を成立せしめるものでなければならぬ、自己自身に同一なるものとして自己自身の述語となるものでなければならぬ、主語となるものが全然述語的なるものゝ中に溶かされねばならぬ、超越的なるものが内在的とならねばならぬ。是に於て働くものゝ概念が成立するのである。單に經驗内容の變じ行くを見るも、直に働くものゝ云ふことはできない、我々は唯物の種々なる方面を見るのかも知れない。働くこと云ふには、物がその性質を變ずるのでなければならぬ、否、性質が性質自身を變ずると考へられねばならぬ。一つの類概念によつて限定せられた反省的範疇の對象界に於て、種々なる關係が構成せられて行く時、働くものゝ概念が構成せられるのである。種

々なる構成的關係に於て立つものが、嚴密に一つの述語的概念の中に包攝することができればできる程、働くものとなる。かゝる方向を極致にまで進め行けば、物の概念は消え失せて純なる作用となる。或物が自己同一として他から區別せられ、それが種々の述語を取るも、未だ働くものではない、働くといふには他の同様な物と必然的關係を有せねばならぬ。併し此兩者が超越的なる或物によつて統一せられると考へられるならば、尙働くものとは云はれない、兩者を統一するものが兩者の述語的一般者でなければならぬ、希臘人の考へた如く同じものが同じものに働くのである。述語的なるものゝ各の點が主語となつて述語とならないと考へられる時、働くものとなるのである。一つの物のみにて働くといふことはできない、働くといふのは相互作用でなければならぬ。互に相働くものを包んで、相互作用の團體を構成するものは、すべての物に共通なる述語的一般者でなければならぬ。

---

私は判断の主語と述語との關係からして働くもの又は働きとは如何に見るべきかを考へて見た。併し判断は固特殊と一般との關係から成立つ、此問題を明にする

ため、尙一層深く概念的知識の本質たる一般と特殊との關係から考へて見たいと思ふ。之によつて構成的範疇を包むと云つた反省的範疇から、構成的範疇への連絡をも示唆し得るかと思ふ。

一般概念はその種差によつて何處までも自己を特殊化して行くが、何處まで行つても一般概念以上に出づることはできない。併しかゝる體系の根柢にも、自己同一なるものがなければならぬ。この自己同一なるものは自己の中に特殊化の原理を含んだものでなければならぬ、自己自身を特殊化するものでなければならぬ、包攝判断は之によつて成立するか、自己自身は包攝判断の對象とはならないものである。併し私は此に概念の矛盾といふとに就いて考へて見よう。相異なれるものを區別するには、その兩者を含む一般概念がなければならぬ。相異なれるものは、一方に於て相同じきものでなければならぬ、之によつて一般と特殊との體系も成立するものである。矛盾は相異の極致である、二つの概念が互に相矛盾すると考へる時、亦此兩者を包む何等かの客觀的統一がなければならぬ、之によつて二つの概念が矛盾すると考へられるのである。此の如き客觀的統一は單に特殊を包攝する一般概念といふ如きものではない。或一つの概念に矛盾する概念を考へるには、我々は

この概念を越えて外に出なければならぬ、相矛盾する概念を統一するものは自己自身の否定を含むものでなければならぬ。色と色でないものとを結合するものは、色でもなく色でないでもないものでなければならぬ。アリストートルは物理学第五に於て肯定的なるものからその反對の肯定的なるもの移行行くのが變化であり、否定的なるものから肯定的なるものに、又肯定的なるものから否定的なるものに移り行くのが發生と消滅であると云つて居るが、相反するものは兩立せず、その根柢に移らざるものがあるとするならば、相矛盾するものに移り行くこと考へ得る場合にも、その根柢に移らざるものがあること考へ得るであらう。

或一つの積極的概念から之と矛盾する概念に轉ずるには一たび否定の立場に入らねばならぬ、すべて肯定的なるものを否定する立場に立たねばならぬ。併し此の如き否定的なるものも、亦思惟の對象となるものでなければならぬ。然らざれば、發生とか消滅とかいふ考すら成立しない。特に親から子が生れたといふ如き場合は、一度否定の立場を通つて又肯定の立場に還ると考へられねばならぬ、而して兩者を否定するものが兩者を結合し統一して居ると考へねばならぬ。或一つの肯定的なる概念に對しては、之と異なるもの、之に反するもの、之と矛盾するものなどを考へ

て見ることが出来る。相異なれるものゝ統一として、客觀的に、その背後に物といふ如きものを考へることが出来る、色と音とは相異なるものであるが、一つの物が色を有ち又音を有つことが出来る。之と共に主觀的には一つの類概念を以て統一することもできる、例へば色も音も感覺的性質といふ一つの類概念に屬するのである。

相反するものは、時の考を入れない以上、一つの物に結合することはできぬ。併し相反すれば反する程、明に一つの類概念に統一せられねばならぬ。相矛盾する二つの概念に至つては、之を統一するに、所謂類概念を以てすることもできない、又その背後に物といふ如きものを考へることもできない。縦、時の考を入れても、一つの物がその矛盾せるものに移り行くこと云ふのは、消滅といふことでなければならぬ。矛盾概念を統一するものは、生物の死することが生れることである如く、否定することが肯定することであるものでなければならぬ、概念の生滅する場所の如きものでなければならぬ無にして有を成立せしめるものでなければならぬ。かゝる矛盾の統一は如何にして積極的意義を得るであらうか。矛盾律によつて構成せられた對象界として數理の世界といふ如きものを考へることが出来るであらう。數理の世界の成立するには、その根柢に若干の假定があるであらう。併し一度、此等の假定が定め

られた以上、一々の數理は必然的なるものとして、矛盾律によつて組織せられるであらう、我々はそこに矛盾の統一なるものを見ることができる。而して數の對象界の統一せられるにも、その基に何等かの類概念がなければならぬ。

矛盾の關係を構成する統一と、相異とか反對とかの關係を構成する統一とは、根柢的にその性質を異にするものではない。矛盾律によつて一つの對象界が構成せられる以上、その根柢にかゝる對象界を限定する一般的なるものがなければならぬ。之に反し相異とか反對とかの關係の成立する根柢にも、否定の原理が含まれて居ないのではない、特殊なるものが互に相否定することによつて統一せられるのである。一般なるものは、すべてを否定すると共にすべてを肯定するものでなければならぬ。唯、所謂經驗的一般概念と考へられるものに於ては、一般と特殊との間に間隙がある、一般より最後の種差に達することはできぬ、一般化の原理と特殊化の原理とか合一することができない。此の間隙を充填し、兩者を結合するため、超越的にして不變なる主體といふ如きものが考へられるのである。矛盾關係によつて構成せられたる對象界に至つては、之と異なり一般的なるものは即ち特殊化の原理なるが故に、その間に主體の如きものを容れる餘地はない、一般的なるものは特殊なるものを成立せ

しめる場所とか、相互關係の媒介者とか考へるの外はない、特殊なるものが却つて主體と考へられるのである。矛盾の統一の對象界に於て始めて全體と部分との關係を見、更に進んで個物的なるものを見ることが出来る。モナツトの世界に於ての如く、各自唯一なる個體となることによつて、全體の統一が成立つ、單に一般的なるものは豫定調和の役目を演ずるに過ぎない。

一般と特殊との關係の根柢には自己同一なるものがあり、而して自己自身に同一なるものは、自己の中に矛盾を含むものでなければならぬ、自己を肯定すると共に否定するものでなければならぬ。すべて一般と特殊との關係の根柢に、自己自身に矛盾するものがあると云ひ得る。判断が自己自身を超越するといふのも、此點に於てでなければならぬ。眞に自己が自己を映す自己同一の對象界は、自己矛盾の對象界でなければならぬ。自己同一が深くなればなる程、自己矛盾が明となり、自己矛盾が明となればなる程、自己同一が深くなる。矛盾的統一の對象界に於て、反省的範疇の對象界が構成的範疇の對象界に結び付くといふことができるのである。種々なる性質を有つと考へられる物の概念は多にして一なるものとして、既に矛盾の統一でなければならぬ。併し一般と特殊との間に罅隙があるかぎり、主語と述語との兩面

の合一せざるかぎり、一方に超越的なる物が考へられ、一方に於て内在的なる主觀的統一が考へられるのであるが、自己同一の深き根柢に達すれば達する程、單なる類概念的統一の對象界から矛盾の統一の對象界に移つて行く。此統一の徹底に於ては、外に超越的なる物を考へ、内に類概念を考へる要なく、反省的範疇の對象界と構成的範疇の對象界とが合一して個物的なるものと個物的なるものとの直接の關係のみとなる。外に主體として考へられた一般者は個物的なるものゝすべてを包含する場所といふ如きものとなり、内に類概念と考へられたるものは對象界を構成するアプリアリとなること云ふことができる。自己同一の對象界に徹底するに於ては、却つて自己といふ如きものが失はれなければならぬ、外にも内にも綜合的中心といふ如きものがなくならねばならない、自己の中に自己を映す鏡の如きものとならねばならぬ。かゝる鏡面に於ては、映すことは構成することであり、構成することは映すことである、映されたるものは、各自が自己同一なるものとして、矛盾の關係によつて統一せられるのである。矛盾の關係を成立せしめるものは、その背後に超越するものであつてはならぬ、而も又單に各項の中に内在するといふこともできぬ、單に内在的ならば、自己を越えて互に關係することはできぬ。かゝる統一は單に創造作用とも



考へ得るであらう、併し創造の背後には之を照すものがなければならぬ、之を映すものがなければならぬ。カントの「我考ふ」といふ純粹統覺も客觀界の統一者でもなく又單なる主觀的統一でない、自己の中に自己を映す鏡でなければならぬ、經驗界は此鏡面に於て構成せられるのである。

すべての概念的知識の根柢には一般と特殊との關係がある、此意味に於てはすべての判斷を包攝判斷の形に直し得ると考へられるであらう。併し概念的知識は完全となればなる程、類概念的統一が矛盾的統一に進む、一方から見れば、一般なるものが自己自身の主語となると考へることができ、一方から見れば、特殊なるものが直に相關係すると考へることができ、私は働くものと云ふのは、經驗的知識がその統一に徹底せんとするより現れ來る概念ではないかと思ふ。經驗的知識といふのは經驗内容を主語とする知識でなければならぬ、即ち經驗内容の合理化せるものでなければならぬ。經驗的知識の成立するには、カントの所謂純粹統覺の綜合といふ如きものを考へざるを得ない。純粹統覺といふのは單なる理解力でもなければ、單なる直覺でもない、兩者の綜合統一である、一方から見れば、主語となつて述語とならざる物の世界の構成者として、單なる論理的一般を超越すると考へられると共に、一方

に於ては自然科學的知識の統一者として、一つの具體的一般者でなければならぬ。此點に於てはすべての概念的知識の根柢を成す具體的一般者と同じく、自己の中に自己を映す鏡の如きものでなければならぬ。判斷的知識として構成せられる以上、構成的範疇の背後に反省的範疇がなければならぬ、唯、具體的一般者の性質が種々に異なるのである。論理の範疇と直覺の形式との結合として圖式時が考へられるが、時は單に流れ去るものではない、時の背後には移らざるものがなければならぬ。時は一般なるものが自己自身を特殊化する形式でなければならぬ、自己の中に自己を自己を映す鏡でなければならぬ。唯その一般者が何處までも主語となつて述語とならないといふ點に於て、單なる性質的一般者と異なつて居るのである。無論性質的一般者の根柢にも自己同一なるものがなければならぬ。併し純粹統覺の自己同一は、かゝる意味に於ける自己同一なるものゝ自己同一である。カントがすべての「私の表象」に「私が考へる」といふことが伴ふと云つた時、私の表象といふのは單に表象の内容ではなく、又單に思惟の内容でもない。それは私の表象であつて、考へる私は私の表象を考へる私でなければならぬ、私の意識を對象とする私でなければならぬ。他面から云へば、意識せられた表象といふのは、經驗内容が自己の中に自己を映

すものでなければならぬ、赤の意識は赤自身の内面的發展といふことでなければならぬ、赤の一般者が自己自身を限定することによつて最後の種差に達することであり、一の個體となることである。アリストートルの如く、經驗と概念との結合を主語となつて述語とならない本體に求めるならば、何處までも主語となつて述語とならないものは、自己の中に自己を限定するものでなければならぬ、自己自身を質料とするものでなければならぬ。かゝる考を押し詰めれば、遂に自分自身を考へるもの、形相の形相といふ考にも到達するであらう。

カントの純粹統覺と、アリストテレスの「思惟の思惟」とは直に同一視することはできないであらうが、我々の經驗的知識の根柢には、主語となつて述語とならないものの述語的一般者がなければならぬ。思惟に對して與へられたものは、既に純粹統覺に於て含まれたものでなければならぬ。時に於ては、一々の點が超趣的なると共に、内在的でなければならぬ、之によつて非合理的なるものが合理化せられるのである、自然界の概念は斯くして成立するのである。而して右の如き概念的統一も、その統一を徹底するに當つて、相異又は反對の統一より矛盾の統一に達すると同様の意義があると思ふ。構成的範疇の世界もそれが知識の世界である限り、反省的範疇に於

て成立し、反省的範疇の性質に従はなければならぬ。如何なる内容の概念も概念として、反省的思惟に屬すると云ひ得るのである。經驗内容が主語となつて述語とならない最後の種差となるには、即ち個物となるには、私の表象、其者が表象せられなければならぬ、表象の表象といふものがなければならぬ、之によつて經驗し得る物の類概念が成立つのである。然らざれば、主語となつて、述語とならないものを考へることはできない。所謂類概念に於ては、特殊の中に一般があると云ひ得るが、主語となつて述語とならない個物に於ては、特殊の中に一般が含まれると考へることができ、物の世界を統一する類概念は一般を含める特殊の一般である。此の如き類概念は唯、自己が自己を離れて見るといふことによつて成立つのである。自己は單に考へるものではなく、感覺するものである、感覺するものを考へるのが自己である。數の概念に於ては一般と特殊とが直に結合するが故に、矛盾的統一といふものが考へ得るが、非合理的なる經驗内容の統一に於ては、何處までも特殊と一般とは直に結合することはできぬ、類概念はその根柢に透徹することはできない、従つて矛盾の統一は成立せないと考へられる。併し我々が我々の表象自身を表象する、否私の表象を私が考へるといふ時、超越的なるものゝ内在化といふ意味がなければならぬ、自覺は

超越的なるものを内在化するのである。思惟の立場から云へば、經驗内容は非合理的であり、思惟すべからざるものであらう、併しそれは何處までも表象し得るものでなければならぬ、而して表象が自己の表象として反省し得る限り、それは又思惟し得るものでなければならぬ。純粹統覺に於て、經驗的知識の一般と特殊とか直に相結合し、矛盾の統一にも達すると考へ得るのは之に由るのである。數の世界に於て思惟し得ると否とによつて唯一の對象が限定せられる如く、經驗界に於て私の表象として考へ得るか否か、即ち經驗し得るか否かによつて、唯一の對象が限定せられるのである。

純粹統覺の綜合統一によつて經驗界が成り立つ、之によつて我々は超越的なるものを内在化し、非合理的なるものを合理化することができる。合理化せられるといふ以上、その背景に類概念がなければならぬ。我々の經驗界を構成する所謂構成的範疇は超越的なるものを合理化する過程と考へることができる。經驗界構成の根本的範疇とも考へられる時の範疇に於ては、一々の點が内在的なると共に超越的意義を有せねばならぬ、其全體は内在的なると共に超越的でないければならぬ。かゝる時間的物に於てその兩面が合致せざる限り、時の背後に變せざるものが考へられる、

即ち主體といふものが考へられねばならぬ。併し右の如き經驗界の統一が何處までも徹底せられ、時間的なる物の概念が自己自身の根柢に透徹して、その兩面が合一した時、物の概念から力の概念に到達せねばならぬ。概念が概念自身の根柢に達する時、數の世界に於て見る如き矛盾的統一が見られなければならぬ、特殊の背後に於ける一般は消え失せて、特殊と特殊とが直に相關係し、一般なるものは形相から形相に轉ずる場所といふ如きものとなるのである。純粹統覺によつて成立する經驗的物の概念が自己自身の根柢に透徹する時、與へられたる經驗内容其者、即ち思惟に超越にして純粹統覺に内在的なるもの、換言すれば特殊なる物が直に相關係せねばならぬ。現在と現在の直接の關係を成立せしめる「時」の範疇は實に經驗界に於ける矛盾の統一でなければならぬ。時に於ては、一度過ぎ去つたものは永遠に過ぎ去つたものである、併し永遠に消え去ることは永遠に存する所以である、時に於ては死することとは生きることである。併し非合理的なるものゝ合理化は、時の範疇に於て、尙その統一に徹底することはできない。時に於ては、外に超越するものを除去し得るとしても、内に超越するものを除去することはできない、外的質料を除去することができても、内的質料を除去することはできない。眞に超越的なるものが内在的となる

には、單に經驗内容が時に於て統一せられるのみならず、經驗内容其者が時を含まなければならぬ。時は單に流れ去るものではない、時の背後に動かないものがなければならぬ、永遠の今といふべきものがなければならぬ。我々の經驗内容が考へられたものでなく、直觀の内容として自同判断の主語となる時、時を内に包むといふことができる。時は現在の直線的系列ではなく、却つて無限の重疊でなければならぬ。我々の經驗界がその綜合統一によつて成立すると考へられる純粹統覺は、經驗自身の直觀として、すべての時を自己自身の中に映す永久の今でなければならぬ。此の如き立場から我々は働くものを見ることができるのである。

超越的なるものを内在化し、非合理的なるものを合理化する純粹統覺の立場に於て、時間的物の概念、即ち經驗し得るもの、概念が成立し、かゝる概念的統一を進み行くことによつて、働くもの、概念を生じ、遂に主體なき作用の概念に到達せなければならぬ。働くもの、概念の透徹は知るもの、概念に到達せねばならぬ、働くもの、背後には尙内面的ならざる何物かが残されて居る、知るものに至つては、全く内面的に一より他に移り行くのである、現在から現在に移り行くのである、一瞬一瞬に消え失せることによつて、内面的統一が成立するのである。働くといふことは物が自己

自身を知ることであり、知ることは働くことの極致でなければならぬ。

### 三

嚴密なる意味に於て知識と稱すべきものは、判断の形に於て成り立つ、判断の最も根本的なる形は包攝判断である、如何なる判断も包攝判断の形に直し得ると考へることが出来る。包攝判断とは一般の中に特殊を包攝することである、包攝判断の根柢には一般と特殊との概念的關係がなければならぬ。一般と特殊との關係は如何にして成立するか、一般と特殊との關係の成立するには、その背後に自己同一なるものがなければならぬ。自己同一なるものとは一般の中に特殊を含むものである、即ち具體的一般者である、如何なる抽象的概念的關係も之によつて成立するのである。斯く考へれば、概念的關係と判断作用とは離すべからざる關係を有つて居る、特殊と一般との根柢に横たはる自己同一其者を現すものが判断作用である。それで具體的一般者即ち眞の一般概念とは、自己の中に自己を映す鏡の如きものでなければならぬ、自己同一なるものとは自ら照す鏡といふ如きものであらう。純粹統覺の綜合統一によつて成立する經驗界といへども、それが我々の認識對象界となる以上、其背



後に一般者がなければならぬ、自ら映す鏡がなければならぬ。此の如き鏡はライブニツツが神が此世界創造以前に無限に可能的世界を考へたといふ神の睿智にも比すべきものであらう。我々が經驗的事實について判断する時、此の如き無限の世界を含む一般者に於て此世界を限定するのである、純粹統覺といふも一般者の自己限定でなければならぬ。此机が檜から造られてあるといふ時、實在が主語となること云ふが、此實在とはかゝる一般者に於て限定せられた一つの特殊に過ぎない、思惟に對しては偶然と考へられるが、之を經驗的事實として必然的と考へしめるものは我々の直觀である。併しこの直觀は思惟に對して外から與へられるものであつてはならぬ、思惟を含んだものでなければならぬ、睿智的悟性といふ如きものでなければならぬ。然らざれば、之によつて認識の客觀性を立することはできないのである。直觀といふのは單なる知覺でもなく、又單なる思惟でもない、藝術家の直觀の如きものでなければならぬ。藝術家の構想に於ても、種々の可能が考へられるであらう、之を決定し行くのが藝術的直觀である、理念が理念自身を見るのである。我々の經驗界を構成するといふ純粹統覺の根柢にもかゝる理念の直觀がなければならぬ。直觀といへば直に主客合一と考へられるが、單に主客合一なるものは尙見られた對象

に過ぎない、眞の直觀は自己の中に自己を見ると云ふことでなければならぬ。カントが純粹統覺に對して與へられた雜多といふものは、單なる雜多ではなくして、無限の可能を含んだものでなければならぬ。此の如き無限の可能を包むものが自己自身を限定するのが純粹統覺である。直觀は一面に於て、構成作用であり、一面に於て判斷でなければならぬ、無限に自己を限定して行くといふ意味に於ては構成作用であり、無限に自己の内に省みるといふ意味に於ては判斷である。直觀が無限に可能なるものを藏するといふ意味に於て、其達すべからざる奥底は一般概念の意義を有せねばならぬ。併し無限に自己の中に自己を限定して行くといふ意味に於て其奥底は總ての實在の根柢に横たはる主體とも考へられるのである。右の如く純粹統覺の根柢には直觀の一面として一般概念が考へられる如く、具體的一般者としての類概念の一面には構成作用とも云ふべきものを考へ得るであらう。例へば色の概念的體系について云へば、純粹統覺といふ如きものは恰も經驗界を構成する純粹統覺に相當するものであらう。純粹統覺は自己が自己を映す自己同一の鏡面に映されて色の概念的體系となり、判斷の對象となる。單に反省的判斷の立場から見れば、主語となつて述語とならない超越的對象とも考へられるであらう、併しそれは自己

の中に自己を映す直観の構成的方面に過ぎないのである。

直観と思惟とは普通に相反するものゝ様に考へられるが、直観の根柢には自己自身を映すものがなければならぬ、かゝる方面に於て反省的思惟が成立するのである。直観は自ら思惟を含まなければならぬと共に、思惟の徹底は自ら直観に至らねばならない。種々なる構成的範疇は非合理的なるものを合理化しようとする思惟自身の發展とも考へることが出来る。概念的知識が概念的知識自身の立場に於て徹底するとは何を意味するか。概念的統一の極致は矛盾的統一に到らねばならぬと思ふ。矛盾的統一とは特殊が唯一なるものとなることとして限定せられることである、斯くなければならぬ、然らざれば此概念の外に出なければならぬといふ様に、唯一的に限定せられることである。矛盾的統一に於ては、何であるかと云ふこと、それがあると云ふこと、何故であるかと云ふことが、一となるのである。斯く特殊なるものが唯一的に限定せられるといふことは、一方から見れば、一般概念がすべての否定を含むといふことゝもなる。すべての限定は否定であると云はれる如く、唯一的限定の一面にすべての否定が含まれて居なければならぬ。真に一般的なるものは即ち具體的一般者は自己の中にすべての特殊を肯定すると共に、總ての特殊を否定するも

のでなければならぬ、すべてを否定する立場に於て、すべてを肯定することができ  
 のである。矛盾的統一に於て唯一のものが限定せられるには、この否定的方面がす  
 べての特殊を否定して單に映す鏡とならねばならぬ、斯くして始めて唯一のものを  
 照し得るのである、一般者が無となると云つたのは此意味に外ならない。之と同時  
 にその肯定的立場に於ては、唯一なるものから唯一なるものに移り行くことができ  
 る、矛盾律によつて一より他に轉ずると考へることができるのである。概念的統一  
 の徹底といふことを右の如く考へ得るならば、我々の經驗的知識の根柢に横たはる  
 具體的一般者が矛盾的統一に到達するに従つて、前に云つた如く、物の概念より働く  
 ものゝ概念に到り、働くものゝ概念より働きの概念に到ると考へるこ  
 とができる、自己の中に自己を映すことによつて純なる作用の概念に到達するの  
 である。超越的なるものが私の表象として内在的となり、非合理的なるものが合理化  
 せられる時、先づ一々が唯一なるものとして時間的に限定せられねばならぬ、一度的  
 なる「時」がすべての否定を含むことによつて唯一のものを限定するのである。而し  
 て時に於ける唯一なるものと唯一なるものとの直接なる關係から、方の概念が成立  
 せなければならぬ。時の背後には、移り行かざるものがなければならぬ、時の特殊

化に對して一般化の方面が力となる。一つの具體的一般者の特殊化の方面が時でありその一般化の方面が力であるとも考へ得るであらう。併し力の概念に於ては、未だ眞に超越的なるものを内在化する立場に徹底することはできない、尙外的なるものが残つて居る。私の表象に私が考へるといふことが伴ふといふ時、すべてが考へる私の範圍に入つて來なければならぬ、自己が自己を映す自覺の鏡の中に包まれなければならぬ。感覺的なるものも内包量となり、更に働くものとして、時に於て自己を顯現すると云ひ得るであらう。併し私の表象は考へる私に屬するとしても、表象の内容は考へる私には屬せない。形式的にはすべてが自覺の中に入るとして内容的には尙超越的たるを免れない。此故に主客對立し外に働くものを考へざるを得ないのである。眞に超越的なるものが内在的となるは、知るものと知られるものとが一とならなければならぬ、自己が他の内容を映するのではなく、自己が自己の内容を自己の中に映さなければならぬ。眞に經驗内容を内に包み之を合理化する純粹統覺は單に表象に伴ふ自己ではなく、表象其者を自己の表現となすものでなければならぬ。考へる私が表象に伴ふのではなく、表象が自己自身の中へ反省するのである、表象が表象自身を映して行くのである。此故に働くものゝ概念は知るも

のに至つて、その根柢に透徹すると云ふことができない。知るものは自己の中に自己の内容のすべての否定を含み、その一々が互に相否定することによつて、互に相關し、統一せられるのである。一般的なるものは全然無内容として單に自己自身を映す空しき鏡となる。その一般的方面が無なるが故に、内容が一々創造的と考へられるであらう。併しそれは何處までも自己の中に自己を映し行くことではなければならぬ、自己自身を映すといふ一般的方面を離れて意識は成立しないのである。

一般の中に特殊を含む具體的一般者といふのは自己の中に自己を映す自覺の鏡に外ならない。無内容と考へられる自己同一の判断はかゝる鏡面其者を示すものと考へることができない。自己の中に自己を省る反省作用其者が自己の中に映されない限り、一般と特殊との間の間隙を除くことはできない、自己同一なるものが現れない、判断の主語の面と述語の面とは合致することはできない。判断とは一般的なるものが自己の中に自己を映す反省的方面を現すものである。例へば、純粹視覺といふ如きものであつても、無限に深く自己の中に自己を映し行くと考へることができらるであらう。併し映すものと映されるものとが一とならない限り、主客相對立し映されたものゝ背後に、超越的なる本體を見ると共に、映す鏡面の方に於ては抽象的

概念の影を見るのである。一般的なるものは、一方に於て超越的本體となると共に、一方に於ては抽象的概念となる。自己自身の反省を映す自覺の立場に於ては、一般的なるものは先づすべての物を包み、すべての物がその中に於て成立する空間と考へられる、超越的本體は變して空間となる。更に此立場を徹底して行けば超越的な物は影像と變して、一般的鏡面は物理的空間、方の場といふ如きものとなる。時を含む空間は、特殊化の原理を内に含む具體的一般者の形相を現すものである。かゝる鏡面に映されたる一點一線も、皆働くものでなければならぬ、力でなければならぬ。併し一般者が自己自身に徹底して行くといふことは、一般的なるものが何處までも自己自身を無にすることである。無限なる空間無限なる力の場としての一般者は未だ全き無ではない、従つて一般者は尙全體の有の意義を有つて居る。唯意識の野といふ如きものに至つて、一般なるものが眞に自己自身を無にすると云ふことができる、全體を包括する空間といふ如きものもなくなる。若し包括的意識といふものがあれば、却つて眞の意識はなくならねばならぬ。意識は互に相否定することによつて成立し、我々の意識の底は絶對の無に通して居る。一般が消滅すると共に特殊から直に特殊に通するのである。我々の意志自由の確信は之に基くものでなければ

ばならぬ、意志は判断を逆にしたものと云ひ得る。一方には色自體の體系として、一方には色の概念の體系として、相對立したのも、今は一つの藝術的直觀となる、創造的意志の統一は無の統一でなければならぬ。